▶令和5年7月1日コロナ感染者発生時対応における振り返り

▶作成者：丸山

▶1日目

・野中さんより、喉の違和感、倦怠感訴えがあり。新型コロナを疑い、すぐに部屋に戻ってもらい、検温したところ37.3℃の微熱があった。他利用者との接触を避けるため、居室から出ないよう伝えた。

・施設長の指示を仰ぎ、防護服着用し武蔵嵐山病院発熱外来に受診。コロナ陽性発覚後すぐに、施設長と芳賀さんに連絡をした。

・帰所後茶室に隔離。普段から使用している物からの感染も考え、日用品などは、窓から外を介して茶室に移動した。

・芳賀さんの指示で、他利用者に感染しないよう備品(ガウン、フェイスシールド、ゴム手袋)は使い捨てとした。玄関で着用し、茶室前にゴミ箱に捨ててからホームに戻れるようにした。

・他利用者に陽性であったことを周知し、手洗いうがいの徹底を伝えた。

・食事の受け渡しは茶室玄関での受け渡しとし、なるべく接触をしないようにした。

▶2日目

・洗い物での感染も考えられたため、紙皿で食事提供をした。

・芳賀さんと相談しながら、他職員への連絡を行い、情報共有をはかった。

・他利用者の検温もバイタルチェック以外（食事の時）も実施し、諸症状が無いか健康面にも配慮した。

・１度本人が外に出る事があった。他利用者や職員との接触による感染拡大も考えられたので、療養中は外に出ないよう伝えた。

▶3日目～10日目

・万が一を想定し、日中活動へ行く利用者の抗原検査を実施。陰性である事を確認してから外出してもらった。

・本人が不安を感じてホームに来ることがあったが、距離を取って対応した。

・本人の入浴、洗濯は他利用者不在時に行い、終了後は風呂、洗濯機洗浄、消毒。ホーム内の触れそうな箇所の消毒を徹底して行った。

▶対応しての感想

　初期の検温前、本人からの訴えの段階でコロナ感染を疑い、部屋に戻って出て来ないよう対応をするなど、他利用者との接触をいかに避けるかを最優先とした。茶室という隔離療養ができる場所があった事も、他利用者、他職員との接触を少なくして対応できる体制が整えられた環境的要因も大きいと思われた。